「エピソード　V」

弔　辞（恩師・石川速夫先生に捧げる）

石川速夫先生、「速夫さん」

私たちは親しみをこめて、速夫さんと呼んできました。恩師であり、恩人であることには変わりませんが、とうとう先生との、お別れの日が来てしまいました。私にとりましては、宇都宮高校二年の時の学級担任であり、日本古典文学の教師であり、宇都宮女子高正門入口のすぐ北側の、藁屋根の旧宅に二年間下宿をさせていただいた書生であり、東京教育大学の先輩でもあります。自分の存在の根拠のような、かけがえのない人を失ってしまった空しさと寂しさに包まれながら、今日は、謹んでお別れの言葉を申し上げます。

光陰矢のごとし・・・先生、五〇年前の宇都宮高校の古文（古典文学）の時間、俳聖松尾芭蕉の「奥の細道」を紐解きその冒頭の名文を朗読されました。

月日は百代の過客（くわかく）にして、行きかふ年もまた旅人なり。舟の上に生涯をうかべ馬の口とらえて老いを迎ふる者は、日々旅にして旅を栖（すみか）とす。古人（いにしえびと）も多く旅に死せるあり。予もいずれも年よりか、片雲の風にさそわれて漂泊の思いやまず・・略・・千住といふところにて舟をあがれば、前途三千里のおもひ胸にふさがりて、幻の巷に離別の涙をそそぐ。

行く春や鳥啼き魚（うを）の目は泪

芭蕉の名と「奥の細道」という紀行文が不朽の名作とは聞いていましたが、直（じか）に紐解きその名文に触れられたのは、その時が生まれて初めてのことでした。震えるような感動にその時うたれていたことを昨日のように思いだされてきます。先生が特に愛読し、専門研究なさってきたのは、万葉集や紀貫之などが編（かなじょ）んだ「古今和歌集」だったそうですが、その古今和歌集の序文である「仮名序」が強く印象に残っています。「・・・花に鳴く鶯、水に住む蛙（かわず）の声を聞けば、生きとし生けるもの、いづれか歌をよまざりける。力を入れずして天地（あめつち）を動か

し、目に見えぬ鬼神（おにがみ）をもあわれと思はせ、男女（おとこをんな）のなかをも和らげ、武士（もののふ）の心をも慰むるは歌なり。」先生の和歌や古典文学に対する熱き思いが伝わってきました。鹿沼の田舎の純朴な中学校から出てきた私にとっては、まさに目の覚めるようなカルチャーショックでありました。

下宿のことで悩んでいた時、担任になった速夫先生に相談しましたら「すぐ隣の古い家の俺の部屋が空いたから、家に良かったら来い」と言ってくれました。思いもよらぬお話で、私の両親に伝えて、願ってもないことですぐさまよろしくお願いしますと言うことになりました。

さっそく私は先生の旧宅のほうに移り住み、そこで先生の義理の父母（奥様の則子先生のご両親）に直接お世話になって、二年間、下宿生としておいて頂きました。速夫さんの奥様であり県立聾学校の教師だった則子先生は九年前に先立たれましたが、速夫さんは、奥様が残された切り絵の作品の中から、「則子・・・切り絵の世界・・・」として、切り絵の素晴らしい作品集を随想舎から出版されました。

「則子の切り絵の本ができたから」と言って、私にその本を三冊も送呈してくれました。

その本の発行は、人生の伴侶であった則子さんへの深い思いと悲しみとが滲んでいるような想い出深い記念の作品集でした。

先生・・・お別れの時が無情にも来てしまいました。大寛町の屋敷には、その門道に、いまも大きな松の古木が生えています。数え年で、今年傘寿を迎えられた先生の歳まで、私はあと十三年あまりなのですが、どうかあの松のように旅路の空で、待っていてください。そしてご遺族の皆さんを見守っていてください。先生、さようなら。安らかに、則子さんとの同行二人（どうぎょうにんにん）の旅を続けてください。

平成二三年六月二六日

鹿沼市　小林　守
（元衆議院議員・前鹿沼市教育長）